



新しい本が入りました！ ※別紙一覧表をご覧ください。

☆特集展示 オリンピックを語ろう！



**【展示のコンセプト】**  
 “TOKYO2020 オリンピック・パラリンピック”が終わりました。アスリートの活躍はもちろんですが、今回はコロナ禍や高度情報化、多様性など社会環境の変化に伴い、様々な課題が浮き彫りになったオリンピックでした。そんな五輪についての歴史や意義を振り返ると共にオリンピックが今後どのように進んでいくべきか語り合える資料（図書・雑誌・新聞記事）を集めて紹介しています。

- ◆ 10月の新着図書が入りました。是非ご利用を！！
- ◆ 大学入試シリーズ 赤本 2020・2021年版を進路コーナーに展示 一人3冊、2週間貸出可能です。

10月のカレンダー (変更になる場合があります)   グレーは休館

日	月	火	水	木	金	土
					10/1 (都民の日) 閉庁日	2
3	4	5	6	7	8	9 土曜授業 午後閉館
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19 中間考査	20 中間考査	21 中間考査	22 中間考査	23
24 31	25	26 開校記念日	27	28	29	30 土曜授業 午後閉館

## 《話題の図書の中から》



『マルクス・ガブリエル 新時代に生きる「道徳哲学」』  
 丸山 俊一、NHK「欲望の時代の哲学」制作班 (NHK出版)

哲学者マルクス・ガブリエルが、パンデミック下での「自由」について語る。ウイルスによって明らかになった「人類存続に残されたチャンス」「倫理的進歩」とは何か？コロナの時代を生きるための提言。



『メディアをつくる！ YouTube やって考えた炎上騒動とネット時代の伝え方』  
 池上 彰, 増田 ユリヤ (ポプラ社)

コロナ禍で学校に行けない子どもたちのために始めた「池上彰と増田ユリヤのYouTube学園」。テレビや紙媒体で活躍する2人が、SNS上での炎上を体験、デジタル時代におけるメディアの在り方について語る。



『武士論』  
 五味 文彦 (講談社)

鎌倉幕府から江戸幕府まで、武家政権が歴史の中枢を担ってきた。承平天慶の乱、前九年・後三年の合戦、保元・平治の乱、源平合戦、承久の乱、南北朝の動乱から足利義満に至るまでの歴史を振り返り、武士の作法や住まいの変遷など、絵巻や発掘の史料をもとに武士について詳述。



『「失敗」の日本史』  
 本郷 和人 (中央公論新社)

歴史を変えた「失敗」をテーマに、元寇、謙信・信玄の跡取り問題、信長による光秀重用など、英雄たちがおこなった数々の失敗を検証し、もし成功していたらという仮説まで登場。「失敗」の中にこそ、豊かな学びがあると著者は言う。



『コーヒーで読み解くSDGs』  
 Jos'e, 川島 良彰, 池本 幸生, 山下 下夏 (ポプラ社)

大学教授、国際NGOの元職員、コーヒーハンターという3人の著者がコーヒーを通してSDGsを解説。コーヒーがSDGsに貢献できることなど、コーヒーへの見方を変え、SDGsの理解を深める一冊。

## 学習支援図書の中から



『円周率πの世界』  
 柳谷 晃 (講談社)

「円の直径に対する円周の長さの比」という定義、有理数であるか無理数であるかさえ、長く判別できなかった数=π。数学者は、その値を探索するなかで、微分・積分などの数学的手法を発展させてきた。アルキメデスやオイラーから、中国の数学者たちまで、数千年にわたって人類の関心を引きつけたπの魅力について語る一冊。

## 《文学賞受賞作・候補作の中から》



『見知らぬ人』  
 エリー・グリフィス【著】  
 上条ひろみ【訳】 (東京創元社)

イギリスのミステリ作家エリー・グリフィスの作品。主人公クレアは、中等学校の英語の先生、彼女が勤務する学校は、ヴィクトリア朝時代の作家ホルランドの住まい。そこでクレアは、先生をしながら、ホルランドについて研究をしている。ある日、同僚エラが自宅で殺され、死体のそばに「地獄はからだ」とのメモが残される。それはホルランドの怪談「見知らぬ人」に出てくる言葉、それから不気味な出来事が続くことになる。

アメリカ探偵作家クラブ(MWA)賞  
 最優秀長編賞受賞



『星落ちて、なお』  
 澤田 瞳子 (文藝春秋)

絵師、河鍋暁斎が死んだ。残された娘のとよ(暁翠)に対し、兄・周三郎は事あるごとに難癖をつけてくる。暁斎の死によって、これまで河鍋家の中でどうにか保たれていた均衡が崩れ、家を継ぐ気がない兄、根無し草のような生活の弟・記六、病弱な妹・きく、河鍋家の行末はとよに重くのしかかることになる。父の影に翻弄され、明治から大正を生きた女絵師の一生を綴る作品。

第165回直木賞受賞作



『氷柱の声』  
 くどう れいん (講談社)

東日本大震災が起きたとき、伊智花は盛岡の高校生。それから10年、フリーペーパーの編集の仕事を通して、被災者と向き合い、人びとの経験や思いを語る言葉に耳を傾けてきた。語れないと思ってきたこと、言葉にできなかったことをまとめ、あらためて震災との向き合い方について問いかけている作品。

第165回芥川賞候補作



『食べものから学ぶ世界史』  
 平賀 緑 (岩波書店)

産業革命、世界恐慌、戦争、そしてグローバリゼーションと金融化、食べものを「商品」に変えた経済の歴史を紹介。そして気候危機とパンデミック下で生きる人たちに、問題の根底にある資本主義のカラクリを解説。食べものから世界経済の歴史を学べば、人も自然も壊さない「経済済民」が見えてくると著者は言う。